
死神さんのボランティア。

櫻井さんっ←。

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

死神さんのボランテニア。

【Nコード】

N6581U

【作者名】

櫻井さん↑。

【あらすじ】

「今日こそは死んでやるっ！」

そう言って乗り出したベランダ
今日こそは…

やっと決心が着き、落ちる…

「よっと、死なせねえよ？」

は？あんた誰よ？

え…死神？

ちよつと意味わかんない…。

自殺願望を持つ女の子とそれを止める死神の不思議なお話です。

見上げれば青白い満月

見下ろせば、小さく点々と見える人々

「あー…」

月が気持ち悪い色してる

なにか、起きるのかな

ついに、あたしの決心が付くとか？笑

女「くっそ、今日こそは死んでやる！」

こう叫んだのは、何回目だろう

20784万回目くらいかなー？

嘘うそ、ちゃんと覚えてる。

忘れもしないあの日、この場所で…。

????くらあ…

やばい、また…

あ、このまま落ちれんじゃない？

よし、さよならこの世ー…。

そう言つて、ここから見える満月に手を伸ばす

「よつと、そうは行かねえよ」

……。
なんなんだ。

チャコールグレー色に身を包んだ何かに引き止められる

女「もう……少しだったのに……」

ベランダから落ちたはずだった
だって、何にも触れてなかったのに
急に何かに手を引かれ、ベランダに戻される

「お前は死なせねえよ」

……ああ、もう、余計なお世話
そう思っていたら、意識は途切れた

女「んー…」

ハッとして目を覚ます

女「あちゃー…朝だ」

あーあ、また死に損ねた
くっそー…

つてあれ？

なんで？

昨日は遂に、意を固めて落ちた…はず…

あ、そー言えば昨日、

女「変な奴に引き止められ…て…」

パッと振り向けば、

女「……何故、居る…」

私のベッドにチャコールグレーのローブに身を包んだ、ヤツが、居
た…

と、取り合えず…

ゴスッ

死神「痛ああああああっ！！！！！！」

女「おはようございます」

死神「おまつ、いきなり、みぞおちにグーでパンチは…っ」

女「ああん？テメエ人のベッド勝手に使っというてなに言ってやがるんですかあ？」

死神「すいませんでしたあああああ！！」

やべーよ、怒ってんのに丁寧語ってなんだよ
恐さ倍増だよ

とか、言ってるコイツを取り合えずベッドから降ろしてに正座させる

女「んで？アンタ誰よ？」

死神「あ、自己紹介が遅れました、俺、死神です」

……死神？

女「はいはい、それで君は誰？」

死神「だから死神って！やだやめてその冷めた目怖い死んでる！」

女「で、死神さんは何しに来たのかな？」

死神「えーとですね、俺は死神なんです、最近自殺者が増えすぎ
ましてですね、死神の仕事が追いつかないのですよ。

それで選ばれた死神が自殺を止める、というボランティアを行って
おります……」

自殺止める死神ってなに

世の中間違ってないか

普通、死神って逆だろ

死を促すもんだろ

死神「それで、お前を止めに来ました」
女「なんで私は止められるんだ」

死神「いやいや、普通自殺はするもんじゃないと思いますよ」

女「私の勝手です」

死神「こら、命を大切にしなさい」

女「てか、止めるの私じゃなくてもいいじゃん」

死神「話逸らさない」

はあ、と死神がため息をつく

溜息つきたいのはこっちだっの

死神「それよりアンタは何なんですか」

女「なにが？」

死神「なんで月曜日と毎月15日に自殺未遂するんですか」

女「…んなの勝手でしょ」

死神「俺に恨みでもあんのかつつの」

女「は、ないわよ？」

死神「知ってますよ」

じゃあ、なんなんだ

女「え、じゃあ何で？」

死神「俺の名前、」

女「…名前とかあるんだ」

死神「名前、月 一吾」

ツキ イチゴ…

女「わぁーおこれは奇遇だね！」
死神「」

女「…なんか、すごいごめん」

死神「だってさあ、毎回月曜日とさあ、

15日に自殺未遂繰り返されるもんだからさあ、

周りの奴らみんなしてお前のせいだとか言っしさあ……」

やべーよ、

私なんか加害者みたいになっちゃったじゃん!!

女「…あのつで、いつ帰るんですか？」

死神「いつ自殺未遂辞めますか？」

女「…え、そんなの死んだらに決まってるでしょ」

死神「いやいや、させないつつつてるでしょーが」

女「絶対してみせますよ」(・ω・)(ドーン

死神「いらねーその自信」

女「だから帰ってくださいな」

死神「だから帰んないってば」

女「はあ…、」

死神「幸せ逃けますよ」

女「あんたがいる事が不幸せです!」

死神「てへ」

やべーよ、

本当に加害者になっちゃってもいいかなうぜいよ」イッ

なんだコイツまじうざい
そう、思っていたら

死神「あの、いいんですか」

急に話し掛けられた

女「なにがですか」

死神「じゃあ、いいです」

女「…はあ？」

なんの話し？

そう、思って目を逸らす

……と、そこには…

女「あああああああ！！！！」

死神「あ、気付いた」

只今の時刻、8時15分

女「学校うううううああ！！！！」

遅刻だあああああ！！！！

このままじゃ居残り反省文だああああ！！！！

ガチャッバタンッ

死神「……二度寝しようかな」

もちろんベッドに入って眠ったのは言うまでもない。

帰宅しました、女です

ガチャ

女「ただいまー…」

誰も居ないの知っててやってます

なんか言わないと帰ってきた気がしないのよね

死神「お帰りなさい」

女「」

女「ぎゃあああああ！！！」ドカツ

死神「え、ちよなに…いだあああ！！！」

女「なに誰お前なに変質者ああ！！！」

死神「なに言ってたんだお前！死神、死神ですううう！！！」

女「…あ」

死神「おい、朝会ってたぞ。学校行ったら忘れるとかお前の記憶力なに」

女「お詫びの品はバナナでいいですか」

死神「俺の心の傷はそんなもんじゃダメです、てかなにその黒いバナナ」

女「食べて」

死神「俺腹弱いので出来れば遠慮したい」

女「食べて」

死神「いや、出来れば…女「食べる」…はい」

死神「…」ぐすっ

泣きそうになりながら黒いバナナの皮を剥きはじめる死神

死神「あの、これいつ買いましたか」

女「…二週間前？」

死神「」

女「辞めときますか」

死神「いいんですか？」

女「一口は食べよ」

死神「ううつ、俺イチゴ派なのに…」

女「名前も一吾ですもんね」

渋る死神

急かす私

しばらくの沈黙の後、

意を決したみたいで黒いバナナを口に運んだ

ぱくっ

死神「…あ、意外とイケる！」

女「うそやーん」

そのあと、死神がうずくまったまま動けなくなったのは言うまでもない

うずくまった死神は、

俺専用の腹痛止めがあるんだ！とか行つて

腹を抱えながら死神界へ一旦帰って行きました

その間に寝る準備をして、

いざベッドへ！行く前に戸締まりをしました

これで死神は帰って来れなくなった！フフツ

女「よーいしょ」

ふああ… やっぱりベッドは一人で使うものだわ…

女「今日はよく眠れそう…」

ピンポーン

女「早っ寝たフリしよう…」

ピンポーン

女「寝たフリ寝たフリ」

ピンポンピンポンピンポンピンポンピンポンピンポンピン
ンポンピンッ

女「うるせええええ！（小声）」

女「さっさと諦めるよ！こんな嫌がらせに私は負けない！断固負けない！（小声）」

決心した束の間

死神「おい」

チャキ

私の首にあてがわれた黒光りするソレは、
紛れもなく死神の必需品、鎌でした――

鎌の当てられた首、
暗い闇の中赤く光る死神の目。

女「（こっええええええええええええ！！！！！）」

死神「俺を閉め出そうとするなんてどういう見ですか？ 女さん？」

女「すいませんすいませんすいません」

死神「人に腐ったバナナ食わせといて自分はすやすやと眠る気ですかそうですか」

女「すみませんすみませんあまりに布団が気持ちよくて出たくなくて」

死神「へえ、このまま一生寝かせてやってもいいけど」

女「ごめんなさいお辞め下さい私死ぬなら飛び降りつて決めてるんです他殺なんて望んではおりません」

死神「ですよえ？」

女「コクコクコクコクコク」

今回分かったこと。

アイツ腹黒い

怒らせると首かつさばかれる

躊躇はない

今恐怖で震えてトイレ行きたい（真顔）

死神「では、おやすみなさい。」

女「勝手に布団に入らないで。」

死神「いーじゃないですか、昨日もこうしたんだし。」

女「いろいろまずいと思います」

死神「いろいろ？…ああ、いろいろねえ？（クスツ）」

女「ちよっ！？なんですか！こっち側来ないで！狭い！」

死神「いろいろ。…確かにこんな状況、女としてはまずいですねえ（クスクス）」

女「分かってんならやめて！」

死神「んー…俺、つつんした子もいけます」

女「はあ！？」

死神「どうしましょう、食べちゃいます？（クスクス）」

女「いつ、や、ちよ！！」

死神「抵抗されんの、俺は好きですよ。逆に燃えるし」

女「は、ちよ、なに言ってるの！？」

死神「嫌がっていたはずなのに自分から求めてくるように焦らすのは至福ですからね？」

女「違う、この人死神じゃない……。悪魔やあああああああ！

!

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6581u/>

死神さんのボランティア。

2011年10月10日08時30分発行